

三浦しをん 著
『マナーはいらない
小説の書きかた講座』

(集英社)【901MI】

国語という教科への揶揄として、『筆者の心情を答えなさい』と言われても、筆者じゃないんだから分かりようがない』なんて言葉を耳にします。これに対して思うのは、筆者の意図を問うたり、登場人物の心情を問うたりする出題はあ

読書案内

つたとしても、「筆者の心情」が問われることではない！（と言いつつ、読みたいけど自信はないです）。本文に根拠を求めるのは難しいからです。筆者がどのような気持ちでその小説を書いたのか、それは一読者として

ては言わば聖域ではないでしょうか。この本は、その聖域に踏み入ることを許してくれるのみならず、人気作家の創作論としても、勿論題の通り小説を書くための入門書としても、非常に面白く読めます。

三浦しをん女史の小説を読むとき、私は観察眼の鋭さと、作

品全体に通底する人間への愛の深さに胸を打たれます。どうやったらこんな魅力的な人物が思い浮かぶのか、こんなカタルシスを引き起こす（あるいはどうにも救いのない）物語を展開できるのか。本書には女史の作品も教材として多数引用されており、それらが出来る背景を知ることができました。特に小説を書くときの「人称」へのこだわりは、知ってから作品を読むと、より工夫が伝わってきて理解が深まるように思います。

「マナーはいらない」という表題の通り、とてもざつとばらんとしていて、でも同時に作者の小説への情熱の凄まじさに惚れ惚れする一冊です。小説を書くつもりは……というあなたにも、是非お勧めです。

喜多川泰 著

『君と会えたから……』

(デイスカヴァー・トゥエンティワン)【入荷予定】

自分が何のために生きているのか、そんなことを考えたことはあるだろうか。考えたことが

ある人もない人も、この本を読むと「生きる」とはどういうことなのかを考えるいいきっかけになると思う。私がこの本に出会ったのは高校二年生の頃だ。毎日通学中に本を読んでいた私は、定期テストが終わって、次に読む本を探していた。いつもは市立の図書館で借りた本を読んでいたが、その日は参考書を探す目的もあつたので、高校近くの書店をうろろしていた。そんなときに、鮮やかな水色の表紙が私の目に入り、なんとなく手を伸ばした。タイトルから

するに恋愛小説かな、と思ったが、中身をパラパラとめくるとそうではなかった。「ライフリストの作成」「円の読み方」など、当時の自分にはない考え方がたくさん書いてあつた。学校の授業では習わないけれども、生きていくうえで大切なことを考えさせられる一冊である。当時の私は、学校の授業の予習と復習、部長としての部活運営、

習い事だったピアノの練習時間の確保など、楽しかったはずのものゝ次第に重荷になってしまひ、やらされているという感覚になり、やるべきものという認識に変わりつつあつた。しかし、気持ちに余裕を持ち、今一番大

切にするべきものは何なのか、そういったことを考えるきっかけを与えてくれたこの本は、そんな当時の私をとて楽にさせてくれた。迷いが生じたときには今でもまだ読み直すことがある私の大切な一冊である。勉強や部活、その他様々な体験から多くのことを感じ、今という時間を大切にしてほしい。そのためにもまず読んでほしい一冊である。

自動運転とAIについて

最近、高齢者の運転事故が社会問題になっている。今年85歳の父を抱える我が家にとつても切実な問題である。一筋の望みとも言える自動運転分野に、AI(人工知能)が活躍しつつある情報を知り、色々な書物を機会ある毎に目にしていく。そんな中、今年から着任した北野高の図書館で『ニュートン』という月刊雑誌に出会い、以前読んだ東大の松尾豊先生の『人工知能は人間を超えるか?』【007MA】のその後の経過が知れるかと読みふけた。

すると一九五〇年頃から、AIの研究が始まり、わずか半世紀余りで、大量のデータを、AIが読み込み、そのデータの中からAI自ら対処方法を見いだす段階までできているというから驚きである。

具体的には、自動運転に、AIを利用する際プログラムの中身を人が確実に車のスピードを制御できる様にAIに組み込ませたりしている。自動運転車は、カメラや各種センサーで周囲の情報を入手し、あらかじめもっている地図データをそれらと重ねて自動的に走行している。だが、当面は高速道路などの限定された環境での条件付きの自動運転が主流であるとのこと。また、ドライバーが居眠りをしていないかを、AIがドライバーの視線や頭部の動き方から危険を検出して、車を止めるシステムの構築が期待されているのが現状。

今後徐々に、AIの技術的な面は進みそうだが、生活道路に使用するまでには、公道で使用するための法律や保険などが整わないとなかなか実用化が難しいのが現状とのこと。つまり、AIが牽引するテクノロジーの進歩に人間側が追いついていな

い

い状態をいかに克服するか今後、目が離せない。今後も定期的に、情報収集のため、図書館通いが続きそうだ。

北野生の皆さんも、これだけの蔵書を抱えた素晴らしい図書館を利用しない手はない。皆さんの日頃抱える問題解決のヒントに繋がる書物に必ず出会えると思ってしまう。この宝の山から探してみませんか。

喜多川泰 著

『「手紙屋」 蛍雪篇 ～私の受験勉強を変えた十通の手紙』(デイスカヴァー・トゥエンティワン) 【入荷予定】

「勉強しなさい」

多くの学生が、親や教師に言われたことのある言葉ではないだろうか。もしかしたら、その度に、イライラを募らせている人もいるかもしれない。では、「勉強するのをやめてほしい」と言われたらどうだろうか？ やったー！と喜ぶだろうか？ それとも不安になるだろうか？ この本の主人公は高校2年生の女の子。将来の進路について、

ちよつと悩んでいます。そんな時に出会ったのが「手紙屋」という全部で十通の”手紙のやりとり”をする仕事。多くの学生が一度は考えた、頭の中をよぎったことがあるだろう「何のために勉強をするのか?」「勉強のモチベーションを長く保つにはどうしたらいいのか?」そんなあり触れた素朴な疑問を、様々な角度から考えさせてくれる一冊です。

実はこの作品は二部作でできており、これは二作品目にあたります。一作品目は「手紙屋」僕の就職活動を変えた十通の手紙」なのですが、どちらも主人公と手紙屋との十通の手紙のやりとりが中心に話が展開されており、非常に読みやすいのに、これまでの価値観をガラッと変えてくれるような発見がつまっています。私は、大学生の時にこの二作品と出会い、まさしく自分の進路について悩んでいたこともあって、とても参考になり、物事のとらえ方に良い影響を与えてくれました。「勉強」に真摯に向き合ってきた北野高校生だからこそ、ぜひ読んでほしい一冊です。

キム・スヒョン 著

吉川 南 訳

『私は私のままで生きることにした』(ワニブックス)

【入荷予定】

私がおすすめるのは、『私は私のままで生きることにした』という一冊です。文章が綴られている小説のようなものではなく、イラストエッセイになっています。内容としては、自分を大切にしながら生きていくための *to do list* や共に生きていくための *to do list* などいくつかの *to do list* が書かれています。

私が共感したのは、「本当の自分と向き合うこと」という言葉でした。現代はSNSが身近なものになり、自分と他人を比べてしまうことがあると思います。私自身、中高生の時、周りと比べてしまい、自分自身を知ることや、自分自身を認めることが少なかったです。この春、大学を卒業し、ふと手に取り、購入したこの一冊を読んで、もっと自分を大切にしたらよかったです。まず自分自身を知り、それから周りの人を大切に思うこと

が大事であると改めて感じることもできました。

今回、北野高校で働かせていただくことになり、北野生の皆さんに、おすすめるの本を紹介すると知ったとき、正直、困りました。なぜなら、私は昔から読書が苦手で、愛読書などなかったからです。漫画なども読まなかったので、本となると教科書くらいでした。本来ならこういう時は小説を紹介するべきなのでしょうと思います。

ですが、私は北野生の皆さんに、この一冊を読んでもらうことで、これから歩む人生や自分自身について考えるためのよい機会になってほしいと思いました。

読書が好きな人も、苦手な人も、気になった本を手に取り、読んでみると新しい発見や気になることが出てくるかもしれません。この際、自分が気になる！読んでみたい！と思う本を探してみる良い機会にもなるかもしれませんね。

読書案内